

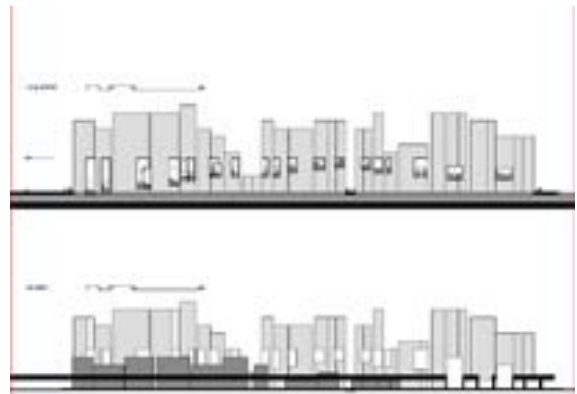


千葉工業大学 工学部 建築都市環境学科

高木 充

渋谷駅東口の歩道橋を歩くと建物の隙間に川が見える。渋谷川である。渋谷には多くの人が集まるが、その存在はほとんど知られていない。

本計画は渋谷川沿いの既存ビルの経済的、情動的価値のない裏側の壁面及びほぼ使われないことのない非常階段を利用して架構体を組んだ複合施設である。現在は川に背を向ける建物が建ち並ぶが、既存ビルの非常階段を利用し新たな動線やボリュームを付け加えるなどの様々な凹凸を与えることでそこで人がコミュニケーションをできる場となり、これまで「裏」として存在していた場所を新しい都市空間として蘇らせようとする試みである。



## 講 評

商業地のビルや敷地利用にありがちな「裏」の部分に空間的な意義という息吹を与えるという、計画としてはとても価値観の高い考え方だと思う。法規や許可などは卒業制作ということで大目に見ると考えると、実際にこのアイデアによってビルの付加価値はかなりアップするのではないだろうか？

計画は、川を完全にふさいでしまうものではないところもポイントではないかと思う。また、造形的にもリズムが楽しく、模型を覗いたときに得られる各ブースの連続的な視界やそれでいてパーソナルな感じのする個々の空間は、高く評価したい。

ただ、この計画での空間の意味や用途などのコンセプト性がやや不明確で、実際のプロジェクトとして実行するには、もう少し意義をもたせる必要があると思う。また、各ブースを支える柱もただバラバラに支柱としての役割を果たすのみで、せっかくならばもう少し配置やデザインに寄与するべきではなかろうかと感じた。いずれにしても、窒息的な時代にこそ必要な救済策として、この計画は光っていた。

[ 審査員 森田 敬介 ]